

レポート

こども園をつくる

—文京区立お茶の水女子大学こども園の記録—

Vol.2 / 開園から3か月 始まりの日々

宮里暁美



一年半の準備期間を経て、こども園は、無事、平成二十八年四月一日に開園しました。初年度は五歳児を募集せず、〇〇四歳児までの編成でスタート。七十名の子どもたちと三十名の保育者や職員たちの生活が始まりました。職員は、新任一名以外は全員が公私立の幼稚園や保育園、こども園での経験を有しています。多様で豊かな経験を積んだ保育者や看護師、栄養士、職員たちが集まりました。新しい園の保育を始めていく上で大切にしようとして確認し合ったことは次の三点です。

- ①それぞれの経験を生かし合うこと
- ②同時に「今ここで新しく始める」という意識を持ち、保育を創造すること
- ③そのために「目の前の子どもたちの姿や思い」をしっかりと捉え応答的にかかわっていくこと

すべてを一から始めていく日々、一つ一つのことを確かめ合いながら、一歩ずつ歩みを進めている毎日です。このようにして始まった日々の中で見えてきたことを紹介します。

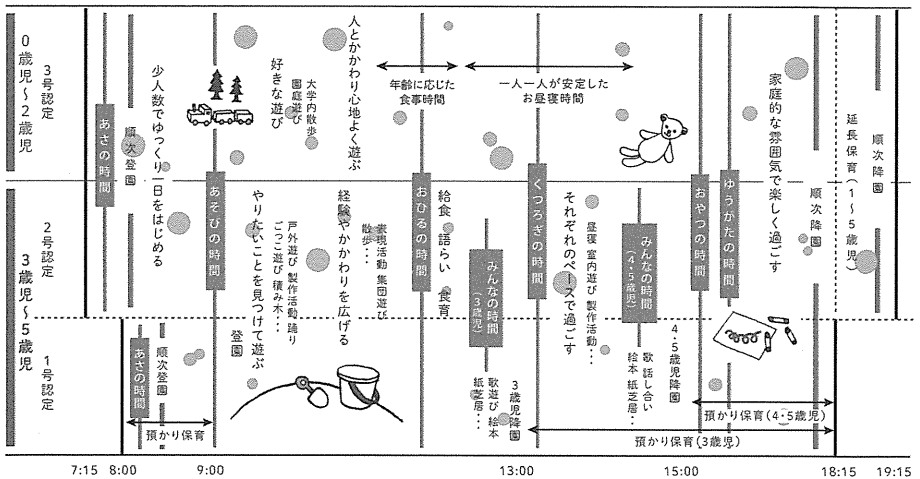
宮里暁美（みやさとあけみ）

お茶の水女子大学附属幼稚園副園長、十文字学園女子大学教授を経て、文京区立お茶の水女子大学こども園設立後、園長に就任。

多様な時間帯を過ごす子どもたち

四月一日、2号・3号認定（保育園）の子どもたちが登園。元気いっぱい過ごす子どもたちの歓声が園中に響きました。一方、1号認定（幼稚園）の子どもたちは、その一週間後、四月八日の入園となります。この差は大きな差になってしまふのだろうかという一抹の不安が心をよぎりました。しかし、それは取り越し苦労でした。「みんながそろろう日」を心待ちにする気持ち子どもたちの中にあつたのです。こうして、みんなのこども園がスタートしました。

こども園では、保護者の就労の有無や介護、用事などの状況によって、子どもたちが園にいる時間帯が違います。同じ子どもでも、日によって時間帯が変わる場合もあります。実に多様なのです。多様であることを大切にして育ち合う保育の創造、それこそがこども園の大きな課題であり可能性であると考えます。

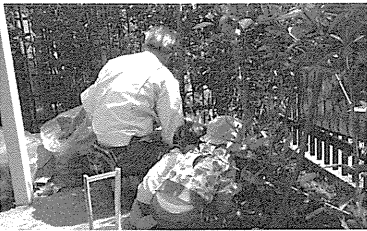


▲こども園の1日の大まかなイメージ（文京区立お茶の水女子大学こども園パンフレットから）

憧れの存在に出会う

こども園の敷地は、大学の南門の横、以前は車庫があつた場所で、歩道沿いの植え込みはほとんど手入れをされていない状態でした。生い茂る笹をかき分けるようにして花苗を植えてスタートしましたが、笹の勢いが強く、花が育ちにくい状態でした。花が育つためには笹を抜いていく必要がありますが、笹は根を深く張り巡らしており、それを根絶やしにするのは並大抵のことではありません。この困難な作業に取り組んだのが用務員のSさんでした。

一階の保育室には、〇〇二歳の子どもたちがいます。ガラス越しにSさんの姿がよく見えていたのです。毎日、笹と格闘するS



▲Sさんのそばにはいつも子どもたち

さんの姿が、子どもたちの心を捉えるのに、そんなに時間はかかりませんでした。

Sさんの周りにはたくさんの子どもたちが集まり、仕事を手伝おうとする姿がよく見られました。

植え込みの所に座り込

み、「Sさんやるー」と土を触る子どもたちの姿からは、特別なことをしている、という誇りのようなものが感じられました。

丹念で丁寧な仕事は子どもたちの心をつかみます。子どもたちの生活の場であるこども

園の中に「丁

寧な仕事」が

あることの意

味に気付かさ

れた出来事

でした。



▲真剣な指先



▲Sさんのすることは何でもやりたい

散歩の中で子どもたちが体験していること

こども園では、ほぼ毎日散歩に出掛けます。四歳児もみじ組の子どもたちの散歩に同行する日々の中で気付いたことがあります。子どもたちは、「ここでこんなことをして遊んだ」という場の記憶を残しながら、その場所を通っているということです。

生協の食堂のガラス窓は鏡のようだということに気付き、まねっこ遊びをしてからは、その前を通ると「あ、いたー」という声がかかります。高さ一メートルくらいの塀がある所では、手だけを出して人形劇のようにして遊んだことがあるようで、「あ、ここー」とうれしそうに言いながら遊びだす様子がありました。日時計も大好きな場所の一つで、今日はどうかなと、影を不思議そうに見ています。珍しく献血車に出会い、「何しているの?」と聞いたこともありました。大学は授業中で、係の人は手が空いていたのでしよう、ゆっく

り説明をしてくださり、「みんなも大きくなったら協力してね」と声を掛けてくれました。

これらの姿を見て気付いたことがあります。こども園の子どもたちが散歩の中で出会っているのは、自然だけではない。人やモノ、コトと出会っているのだということです。

今回、「第二園庭」

として整備されたのが、旧学生会館前の広場です。建物の改築に伴い広場が広くなり、そこに新しい土や砂が入り、子どもたちが安心して遊べる環境になりました。この場所で遊んでいると、大学附属のナーサリーや学校の子どもたちに出会



◀▲「第二園庭」の広場でゆっくり遊ぶ



うことができ、喜びになっています。樹木が生い茂り、走り回っても大丈夫な場所かと思いに遊ぶ時間は、伸びやかで、まさに園庭で遊んでいるかのような気持ちになります。今後は、さらに遊びの継続や深まりが生まれる工夫をしていきたいと考えています。

眠りについて考えたこと

敷地面積に限りある中、私たちはオープンスペースを積極的に取り入れました。一階は一、二歳児の保育室、二階は全体がオープンスペースです。

室内は、木の床の暖かさと窓から見える空や木々の緑が空間に伸びやかさを与え、すがすがしい気持ちにさせる空間になりました。しかし、広くて開放感がある



▲オープンスペース

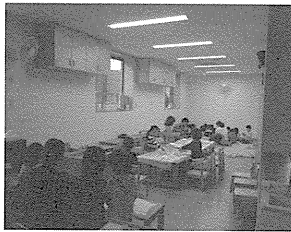
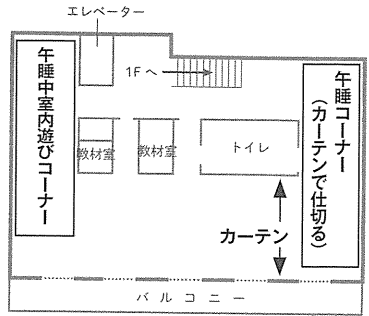
という良さは、同時に、落ち着けないという弱点を持っていました。その影響は、午睡のときに現れました。午睡する子どもたちとその他の空間を区切るのはカーテン一枚です。壁で仕切られていないので音が走ってきてしまい、入園当初の不安定さに空間の不安定さが重なり、寝ようとしても眠れないという状況が発生してしまいました。午睡が不足した状態で帰宅した子が夕食を食べながら寝てしまったという声が保護者から寄せられ、私たちは頭を抱えてしまいました。子どもたちが安心して遊び、安心して眠れる園をつくることは、園づくりの大前提だからです。

こうして心地よく眠れるための努力が始まりました。1号認定の三歳児は十三時に降園します。その後から午睡の準備が始まります。電気を少しずつ消し、話し声も静かにして、眠くなる雰囲気づくりを進めていきました。午睡しない四歳児は園庭で遊び、まだ眠くないという何人かの三歳児は午睡コーナーとは

離れた場所で遊ぶことにしました。眠りたくなる場の雰囲気づくり、心に碎き、「眠くてたまらない」という子どもから眠れるようにして眠りの輪が広がっていくという流れを大切にする中で、確実に眠れる状況ができてきました。

そして四月末、運命の雨の日がやって来ました。それまでは晴天続きだったので、四歳児たちは園庭で過ごしていました。しかし外は雨。外に出ることはできません。眠る子と眠らない子がカーテン一枚で仕切られた空間において双方共に満たされるということができののだろうか、少々悲観的になりながら私も保育に加わりました。しかし、それは杞憂に終わりました。

眠っている子どもたちから一番離れた場所に、落ち着いて遊べるコーナーをつくり、そこで保育者もゆっくりかかわりながら過ごしてみました（下図参照）。しばらくして午睡コーナーを見に行くと、そこではスヤスヤと眠



▲集中して遊ぶ



▲ぐっすり眠る子どもたち

る子どもたちの姿がありました。「寝ないという子」の中には「本当は寝たほうがいい子」が交じっています。「でも今は寝たくない」というその気持ちを受けとめられる中で、いつか「寝ていく」。そのプロセスを大切にしたい、と気付かされました。この環境だったからこその気付きかもしれません。